



長谷川 淳 電気学会会長に聞く 函館工業高等専門学校長、北海道大学名誉教授

21世紀型の、 魅力ある学会を目指して

◇初代の榎本会長から数えて92代目の会長に、昨年5月、就任されました。そこでまず、先生が考えておられるところをお聞かせください。

電気学会は1888年の設立で、3年後の2008年で120周年を迎えます。伝統のある学会の会長の職にあることは、大変名誉だと思うと同時に責任の重さを痛感しています。また初代会長の榎本武揚先生が函館に深い縁をお持ちであったことを思うと、現在、函館工業高等専門学校長である今、91代経て巡りめぐって来た不思議なご縁を感じています。

さて、日本社会に目を転じてみますと、これまでの社会に比べて、これからは非常に多様な価値観を認める社会になっていくだろうと思います。専門性の枠組みがより柔軟になり、互いに融合し合えるような枠組みの中で専門性を捉える時代になっていくことはまず間違いありません。そうした中で、今後はしっかりした足場を持てる学会活動が要求されます。そのため、他の学会、協会とこれまで以上に連携を深め、しっかりとした活動を展開できる、柔軟性を持った組織にしていきたいと考えています。これまでの20世紀型の社会から21世紀型の新しい社会に移り変わっていく中で、電気学会もそれに対応した学会であらねばなりません。

◇具体的に進めておられる諸施策をお聞かせください。

いま電気学会を含めて、いろいろな学会が少子高齢化の中で会員数を維持することが容易でない状況にあります。そのため電気学会をよりいっそう魅力的な学会にしていかなければなりません。

その具体策は、まず専門学会として魅力を高めるために、会員の皆さんと一緒に可能なかぎり多くの施策に取り組んでいく必要があります。そのことが会員の減少に歯止めをかけることに繋がっていくからです。

二番目に重要なのは、社会的なステータスを高めることです。その重要な柱が、社会に対する情報発信で、これを積極的に行わなければいけないと考えています。これまで専門学会として、会員に対してはいろいろな情報を発信してきましたが、これからは外に向かって、情報発信をより積極的に行っていくことが肝要です。

三番目に重要なことは、海外でのステータスを向上させることです。これまでも国際的な活動はそれぞれの立場で努力をしていますが、学会全体として国際的ステータス向上のための仕組みを、もう少ししっかりしたものにしなければなりません。

いま最大の課題は、論文誌の国際的なステータスの向上です。海外で認知される論文誌になるように英文誌の発行や論文誌の英文化率についていっそうの向上を目指していきたいと考えています。さらに国際活動担当の理事や、社会への情報発信のための広報担当理事なども、しっかりした位置づけにする必要があると感じています。

一方、これから、学会として重要になってくるのは、教育の分野、特に継続教育の分野ではないかと思えます。技術者として実社会で仕事をしておられる方々が、さらに上のステータスで社会に認知してもらえるようになるためには、継続的な教育がきわめて重要です。それに対しては、学会は専門家集団ですので、かなりの役割を果たすことができると思えます。そのような場合、電気学会は、専門学会として電気関係技術、電気関係工学に関する教育について、なにがしかの認定をするということも検討しなければならない時期も来るのではないのでしょうか。

◇これからの学会のあり方について、また若い技術者・研究者へのご助言がありましたらお聞かせください。

先ほど、これからは専門性の枠組みがより柔軟になるという話をしましたが、いま私がちょっと気になっていることは、学会が細分化されすぎているということです。アメリカのIEEEは世界的に認知されていますが、それは、その下に組織されているソサエティがかなり独立性の高いものとして存在し、しかもそのソサエティを包含しながら大きな集合体になっていることです。そのため、ソサエティで活躍している方もIEEEの会員として評価され、世界的にも発言力、影響力が高いのです。このような組織にするには、日本ではまだ難しい面もありますが、将来が期待される若い技術者・研究者のためにも、日本もそのような構造を構築できればすばらしいのではないかと期待しています。

また電気学会がカバーしている分野は非常にすそ野が広く、それぞれが大変重要な学問領域です。私の専門分野でもある電力・エネルギー関係も、まだまだチャレンジングな分野ですが、それ以外にも会員の皆さんが取り組んでいる技術分野で、世の中を大きく変えていくような新しい課題はたくさんあります。特に地球環境問題の解決などは^{しゅうひ}焦眉の急な課題です。その中には、電気学会だからこそ解決できる課題もたくさんあります。ですから若い研究者・技術者は自信を持って、研究・技術開発に邁進すると同時に、世の中に積極的に情報発信してほしいと願っています。

【プロフィール】 (はせがわ・じゅん) 1971年北海道大学大学院工学研究科博士課程修了。同年北海道工学部電気工学科講師、1972年同助教授、1985年同教授、1997年同大学院教授。2004年北海道大学名誉教授、同年函館工業高等専門学校長。2005年社団法人電気学会第92代会長。工学博士。